ビオトープ・イタンキ通信　第16号

NPO法人　ビオトープ・イタンキ in 室蘭　　2025年5月1日

NPO 法人 ビオトープ・イタンキ in 室蘭では「ホタル再び、 人にやさしい街・室蘭」を合い言葉にビオトープ作りを進めています。 原始のままの海岸線、 鳴り砂の浜に続く草原の一角に、 今は失われてしまった湿地を復元し、 子供たちが生き物と触れ合える場の再生を目指しています。

◆獲物のあるビオトープ◆

イタンキでの「獲物のあるビオトープ」の活動については、NPO の20周年を迎え磯田広史さんが新しい理事長になります。
この機会に活動のキッカケとなった「鶴の雫」についてのメモを紹介いたします。

１）ビオトープ・イタンキの構想を具体的に提起するのに先立って、1998年後半より隣接する窪地で、先行実験を続けてきました。そこは山の斜面から土砂を採取した跡と思われる窪地で、5×10m程度あり、中央から少量の湧水があって湿地となっていました。地元の「鶴ケ崎」から鶴の字をとり、ほんの1滴ほどの小池であることと「雫が寄って海となる」という言葉にあやかるように「鶴の雫」と名付けて、密やかにスタートしました。

翌春から、ボツボツと池の手直しと動・植物の導入を始め、一部の早いものは既にいくつかの良い結果が出ています。

動物では、導入したイバラトミヨは順調に繁殖して飽和状態、エゾホトケドジョウも池の環境が良くなるにつれ良い結果が予想されます。卵塊で導入したエゾアカガエルも1年後の今春産卵が見られ定着確認。昆虫ではアカネ類のトンボ、マツモムシが2種、1cm位のゲンゴロウが姿を見せていました。ホタルの餌となる巻貝類も色々と導入しているのですが、わずかに生き残っている程度。

植物は動物に比べると一般に結果が見えてくるのに時間がかかりますが、徐々に成果は上がっています。ビオトープの予定地は、潮風が強いうえに砂がちの荒地であるという条件と、失われた室蘭の湿地を復元するという目的からして、市販されている苗の利用は限られたものとなり、同時に大量の山採りも不可能なので、この先行実験池「鶴の雫」の果たす役割は大きいと思います。

これからスタートする緑の基本計画の中で、この展望台のある小山が、ふるさとの森として緑化される時には、「鶴の雫」はその一角となり湿性植物の豊かな植生を示すことになります。

2011年6月のビオトープ・イタンキ

このリストは同時に、最悪のケースとして「鶴の雫」が「不法な無許可工作」と判断された時に、私自身の手で、導入したものを処分・撤去するための覚えとしての意味も持たせてあります。

多くの皆様の理解と支持を得て、ビオトープ実現の役に立てれば幸せです。

（　一部省略、次ページに続く・2001年11月13日　）